| 研究区分 | 教員特別研究推進　教育推進 |
|---|---|

| 研　究<br>テーマ | 新型コロナウィルス感染症対策下での看護実践能力獲得に向けた<br>看護学教育に関する実践研究 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 研究組織 | 代　表　者 | 所属・職名 | 看護学部・教授 | 氏名 | 林　みよ子 |
| | 研究分担者 | 所属・職名 | 看護学部・教授 | 氏名 | 山田　紋子 |
| | | 所属・職名 | 看護学部・教授 | 氏名 | 田中　範佳 |
| | | 所属・職名 | 看護学部・講師 | 氏名 | 前野　真由美 |
| | | 所属・職名 | 看護学部・助教 | 氏名 | 松裏　豊 |
| | | 所属・職名 | 看護学部・助教 | 氏名 | 鈴木　郁美 |
| | | 所属・職名 | 看護学部・助教 | 氏名 | 中岡　正昭 |
| | 発　表　者 | 所属・職名 | 看護学部・教授 | 氏名 | 林　みよ子 |

**講演題目**

新型コロナウィルス感染症対策下で実施した慢性看護学実習の利点と課題

**研究の目的、成果及び今後の展望**

**研究の目的**：新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の拡大防止対策に伴って臨地での実習時間の短縮や学内での実習への変更が余儀なくされている。COVID-19 対策下で実施した臨地実習と学内実習を評価し、看護実践能力獲得のためのコロナ時代の実習方法を検討した。

**成果**： 2021 年度の慢性看護学実習は、一部施設ではまん延防止等重点措置期間中の実習は許可されず学内実習となったが、約 90％の学生は実習時間短縮となった施設もあったものの臨地での実習が可能であった。臨地実習は、患者を１名受け持って看護過程を展開した。学内実習は、学生個々に異なる紙上事例の看護アセスメントを行い、模擬患者(教員)に対して自己の立案した計画に基づくケアの実施・評価を行い、この過程の中で捉えた疑問を学生カンファレンスと文献を用いて考察した。これらの実習を行った学生(18 名)に自分の実施した実習の評価をヒヤリングしたところ、以下のような利点が語られた；１）学内実習：「時間をかけた看護アセスメントや看護技術の繰り返し体験ができる」ために「アセスメントに対する自信や技術力の向上が感じられる」、２）臨地実習：「患者の変化する心理状態やケアに対する反応を表情や目線で感じられる」、「看護師のケアと自分のケアを比較できる」ために「将来につながるリアルな学習を実感できる」。看護学教育における臨地実習の目的は、現場で人間関係の中で学ぶことであり、短時間であっても、現場に身を置いて患者や医療者と関わる体験ができる機会を確保することが重要である。一方、臨地と学内との双方向実習を実施している看護系大学の教員(1 名)にヒヤリングしたところ、学生の思考力が向上し満足できる実習であるが、デジタル教材作成のために臨床現場からの映像や事例の提供が必要であること、教材作成など実習前準備にかかり教員の負担が過剰であることが語られた。コロナ禍２年目となり臨地実習の重要性が再認識されている今、代替実習に取り組むだけではなく、臨地実習の本来の目的と臨地での実習を前提に実習施設と大学と取り組むこと、実習単体ではなく関連する講義や演習を含めた教育内容の再検討が重要であると考える。

**今後の展望**：教育効果の高い臨地での実習をコロナ禍でも継続するためには、患者の生命を守ること、患者・家族や社会に看護学教育における臨地実習の重要性を理解いただくことが不可欠である。しかしながら、若者の COVID-19 感染拡大が報道されることもある中で入院治療をする患者や家族にとって、容易に受け入れられるものではない。質の高い看護専門職者の育成における臨地実習についての社会的な認知と理解が喫緊の課題であるといえる。